

2 社会科

上之園強・佐藤 健・柏木俊明

1 社会科における自立の必要性

国際化、情報化、高齢化、地球環境の悪化等、子どもたちを取り巻く社会は急激に変化しており、今後もさらなる加速化が予測される。子どもたちにとって、これらの社会の変化が自分たちの生活にどんな意味をもたらすのか、自分とのかかわりの中で社会を見つめ、自分自身の生き方に思いを巡らせながら、自己を確立していく学習が不可欠である。

子どもたち一人ひとりの生活と結びついた学習の充実を図り、「社会を形成する一員として、自ら考え判断し、行動して、自分たちの生活をより豊かにすることのできる力」を育むことが必要である。子ども一人ひとりが、学習の仕方を習得しながら、自分なりの問題意識と見通しをもち、問題を解決しようとする意欲や態度の育成を重視していきたい。

2 社会科における自立と人やものとのかかわり

(1) 自立と人やものとのかかわり

社会科部では、自立を、「社会的事象について、自分でめあてを決め、それを追究し、その結果を自ら振り返り、新たなめあてをつくることで、よりよく生きていこうとすること」と捉えた。

このような自立する姿に向かっていくためには、「人やものとのかかわり」が不可欠である。自立とは依存との相互関係であり、自分自身を見つめ深めていくためには、他者（人やもの）とのかかわり、他者から学ぶことが求められるからである。社会科においては、社会的事象との出会いの場、追究過程やふりかえりの場など学習の様々な場面で、人やものとのかかわることが求められる。

(2) 社会科学習における人やものとのかかわり

社会科学習における人やものとのかかわりは、主に次の2つが考えられる。

1つ目は、「学びの対象としての人やものとのかかわり」である。社会科における学びの対象は、人やものそのものである。それを整理すると、次のように分類できる。

人	個人（固有名詞）、集団（地域のサークル等）、組織（幕府、国際連合等）
もの	物（道具や遺産等）、出来事（社会の出来事）、文化（地域や歴史的な文化等）

社会的事象は、人（組織体を含む）の織りなす行為の過程であり、その結果である。従って、学びの対象である人やものとのかかわり方の度合いによって、学習課題や追究の深まり方が異なってくる。社会認識や市民的資質を深めていく上で、学びの対象である人やものとのかかわりあっていくことは、不可欠である。

2つ目は、「学び合いにおける人とのかかわり」である。社会科学習のねらいは、「科学的な社会認識を形成し、市民的資質を育成する」ことである。子どもたちは社会的事象に対して課題をもち、その課題を解決するために社会認識や社会的判断を行おうとしている。しかし、子どもたち一人ひとりの社会認識や社会的判断は、時として十分深まっていなかったり、一面的な判断であったりする場合もある。集団での学び合いを通すことで、児童一人ひとりの社会認識や社会的判断の幅を広げたり深めたりすることが可能になってくる。このことは、社会の一員としてよりよい社会を形成していくうえで必要であるとともに、結果的に、個の学びを深化させることにつながると考える。

3 めざす子ども像

以上の考えに基づき、「めざす子ども像」を大きく以下のように設定する。

- ◎ 学び合いを通して、自分を高めようとする子ども
- ◎ 社会的事象について、積極的にかかわろうとする子ども

具体的には、学習過程にあわせた次のような子ども像を設定する。

- ア. 問題を焦点化することができる子ども
- イ. 問題解決の見通しをもつことができる子ども
- ウ. 問題を科学的に追究することができる子ども
合理的に意思決定することができる子ども
- エ. 学習成果を工夫してまとめたり発信したりすることができる子ども
- オ. 学習したことを次へつなげたり、実生活に生かしたりすることができる子ども

4 「自立に向かう子ども」を育成するための方策

社会科部のテーマに迫るために、次の4点からのアプローチを大切にしていきたい。

(1) 教材構成

「人やもの」に焦点をあてた場合、次のような教材を開発していく。

- 人やものの働きやその社会的意味が子どもにとって具体的に捉えやすいもの
 - 繰り返し問いかけることで、内容の広がりや深まりが期待できるもの
 - 子どもの興味・関心が喚起されやすいもの
- また、取り上げる社会的事象としては、次のようなものを想定している。
- 社会的論争問題を内包し、価値判断を促すような内容の広がりのある素材
 - 環境問題、国際化、情報化など社会の変化に対応した新しい内容を含む素材
 - 過去・現在から学び、自分たちの将来を見据えることのできる素材

(2) 学習過程

自分なりの問題を見つける、計画を立てる、自分なりの考えをもつ、自分なりにまとめるといった子どもたちの主体的な学習の保障という視点から、「めあて追究」の学習を大切にしていく。「めあて追究」の学習は次のようなステップを基本とする。

- ア. 社会的事象に出会い、自分なりの問題を見つける。
- イ. めあて追究の計画を立てる。
- ウ. めあて追究の計画に沿って個人や集団で追究や吟味をする。
- エ. 追究結果を自分なりの方法で表現し、お互いに学び合う。
- オ. 自分の追究結果を振り返り、自らの考えの変容や追究のよさに気づくとともに、新たなめあてを見つける。

(3) 学習活動

実体験や追体験等、具体的で多様な次のような学習活動を意図的に組み込んでいく。

- 問題を発見したり、吟味したりするための話し合いや表現など学び合いの場の重視
- 子どもたちが実感できるような体験や調査活動の重視
- 社会参加等、学習したことを生かすことのできる実践的な活動の重視

(4) 学習の評価と支援

学習を展開していく際、子どもたち一人ひとりが何に関心をもったり困ったりしているのかを十分に把握しておく必要がある。子どもたちの学習状況を看取り、子ども個々の状況に応じた支援を行っていく。評価にあたっては、観点別学習状況評価規準を設定し、単元展開の中で焦点化を図りながら、適時評価を行っていく。

特に、人やものとのかかわりを重視する点から、児童が相互に学び合い、ねらいに向かって深め合っているか、また、学習の対象である人や事象とどうかかわり、学びを深めているかを看取っていく。

5 成果と課題

(1) 教材構成について

学 年	取り上げた事例	焦点化した人	取り上げたもの、こと
中学年	錦鯉の生産と輸出	養鯉業者、錦鯉の輸入業者	錦鯉、ニシキゴイと各国の文化
5 学年	自動車の生産と価格	自動車の生産・販売者、自動車の購入者	自動車生産、価格の設定
6 学年	西中国山地の熊出没	被害に遭った人 地域で解決をはかる人々	熊、被害を受けた農作物、中山間地域の林業や地域の変化

中学年では、身近な地域の地場産業を取り上げ、人やものとかかわることができるような単元を構想した。錦鯉という子どもたちにとってなじみやすい題材を事例に、直接養鯉場を見学する活動を取り入れることで、子どもたちは養鯉業に携わる「人」に進んでかかわることができた。また、海外での錦鯉の普及の事実をその国々の文化と絡めて理解できるようにした。地域のよさを見つめるのに適した地域素材であったと考える。

第5学年では、学校の近くにある自動車をつくる会社を具体的に取り上げた。ここは、日本でも代表的な自動車を作る工場で、子どもの関心も高い。この教材を通して、日頃から利用している自動車が、どのように作られているか知ることができる。また、自動車などの製品をつくるためには、人々の工夫・努力の必要性や利用者のニーズを考えた製品作りが行われていることに気づくことができた。日本の工業を具体的に考えることができる教材であると考えた。

第6学年では、西中国山地や広島市近郊で起こっている熊出没問題を取り上げた。この問題を取り上げることにより、出没地域での農作物被害や人的、精神的被害とその解決に向かう人々にふれることができた。また、出没の背景である山林の荒廃、住宅地などの開発による生息地の減少といった自然環境の悪化、中山間地域での人口構成の変化に伴う生活や農林業の変化といった社会的問題に出会うことができた。自然環境と人間との共生を考える上で意味のある地域素材であると思われる。

(2) 学習過程

中学年では、導入で広島と錦鯉とのかかわりをいろいろな角度から見ていった。児童は、身近な錦鯉ではあるが、広島との結びつきの深さに驚きを感じていた。そのことが、単元を通しての学習意欲へとつながったと考える。展開では、養鯉場の見学を取り入れ、養鯉業に携わる具体的な「人」と深いかかわりをもつことができた。そのことが、子どもたちの追究意欲を喚起した。錦鯉の輸入に直接かかわっておられる方をゲストティーチャーとしてお迎えすることができれば、子どもたちの目はさらに海外へと広がったと考える。

第5学年では、価格から自動車工業を見ていく学習過程とした。導入では、チラシから自動車には様々な価格が設定されていることに気づき、「どうやって価格がつけられたのか」という学習課題を設定した。展開では、価格はいろいろな費用の集合であると捉え、自動車の生産を追究していった。そこで児童は、価格を通して開発から販売までの一連の過程や消費者のニーズを考えた自動車づくりについて深めることができた。課題は、「価格」についての資料が少なく、追究していく上で難しさがあることである。

第6学年では、最初に熊の被害を具体的に捉える場面を位置づけた。特に「実際に熊と出会った方」のその時の状況や話が話、児童自身が同じ人間としてなんとかしなくてはという解決への意思をもつ上で極めて効果的であった。また、単元導入部では、児童の素朴な思いや解決策を述べあい、どの解決策がより確かであるかを児童相互に吟味する場を設定した。このことは、児童が、自分の社会認識の不十分なところに気づき、その確かさを求めようと意欲をもつ上で効果的であったと言える。